

駆け抜けた日々

第7期生 菊盛 真衣

小野ゼミで過ごした2年間に一言で感想を言うならば、「駆け抜けた。」という言葉がびたりと当てはまる。月日は風のように過ぎ去っていったけれど、その中で作った抱えきれないほどの思い出が私の記憶の中にちゃんとしまわれていて、今日の私を支えている。

それにしても、この限られた紙面の中で小野ゼミでの2年間を振り返るには、思い出があり過ぎる。あり過ぎて、何から書き始めたらよいのか、何を書けばよいのか、うまく言葉が出てこない。今までイベントのレポートも、英論の研究を終えても、すらすら書いてきたのに、今回ばかりはあまり筆を進めたくないようである。これを書いたら、本当に「ゼミ」が終わってしまうような気がするからである。

しかし、ここで言うておかなければならないことがある。それは、先輩、後輩、同期、そして先生への感謝の気持ちである。私がこの2年間を無事に駆け抜けてこられたのは、彼らの大きな支えがあったからである。先輩、特に6期生の先輩には本当にお世話になった。先輩にはよく飲み連れて行ってもらったし、入ゼミイベント前は必ず先輩宅で合宿させてもらった。精神的に相当辛かった就活期には、大体週1、2ペースで先輩と飲んで、カラオケでオールしていたところもまた、小野ゼミらしかった。先輩、楽しい時間を本当にありがとうございました。8期生の後輩にもお世話になった。私は1人の先輩として後輩を育てようと、手厳しく言ったこともあったし、時には怒鳴り散らしたこともあった。しかし、それを含め様々なことを乗り越え、8期が成長し、小野ゼミのことを真剣に思うようになる姿を見て、私は密かに嬉しく思っていた。これからも全力で小野ゼミを盛り上げて行ってほしい。頑張れ、8期生。また、同期である7期生には、お世話になり過ぎて、頭が上がらない。本当にありがとう。たくさんの時間を共に過ごし、楽しいことも、苦しいことも全て、7期のみなどと乗り越えてきた。辛いことや面倒くさいことも、みんなとやれば楽しかった。とにかく、よく喋り、よく笑った。まわりにいつも7期のみんながいたおかげで、私は2年間立ち止ることなく、駆け抜けてくることができたとと思う。ありがとう。そして、小野先生、2年間本当にお世話になりました。私に「小野ゼミ」という環境、そして機会を与えてくださったこと、またどんな時でも熱心に育ててくださったことに感謝します。これからもどうぞよろしくお願いします。

書き終えたくなかったこのエッセイだが、たくさんの思い出を語る前に筆を置くことになりそうだ。ちょうど良いだろう。次年度のエッセイを書くまでには、この2年間の充実した日々を少しは言葉にして語りことができそうである。



尊敬する先生、先輩と。(著者は右側)